

平成 29 年度決算

茨木市 財務書類



茨木市 企画財政部 財政課

目 次

I 新しい地方公会計制度について	1
II 新しい地方公会計制度における財務書類	2
III 対象となる会計の範囲	3
IV 財務書類4表	4
貸借対照表(BS)	4
行政コスト計算書(PL)	6
純資産変動計算書(NW)	8
資金収支計算書(CF)	10
V 財務書類から見てくる茨木市の状況	12
VI 一般会計等 財務書類	15
VII 全体会計 財務書類	20
VIII 連結会計 財務書類	25

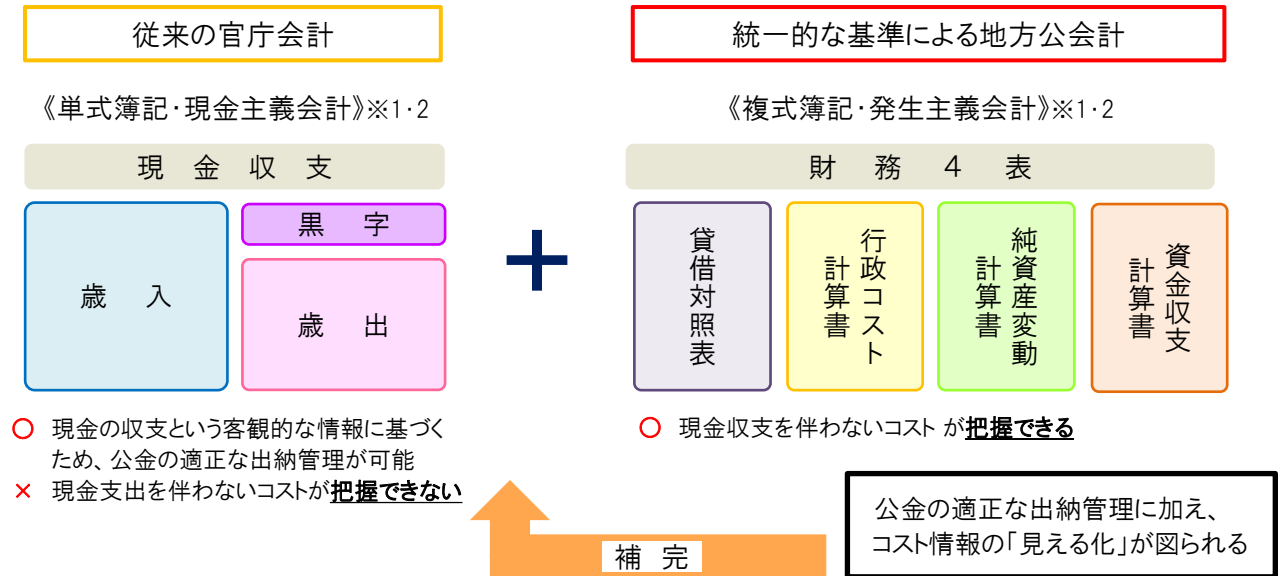
I 新しい地方公会計制度について

統一的な基準による「公会計」の整備とは

財政情報の透明性を確保し、財政運営の効率化・適正化を図るため、平成14年度決算から「旧総務省方式(2表)」を、平成20年度決算からは「総務省方式改訂モデル(4表)」による財務書類を作成してきました。

こうした中で、総務省は平成27年1月に、より一層の財政マネジメントの強化や、団体間の比較可能性を高めることを目的として、「統一的な基準による地方公会計マニュアル」を公表し、同マニュアルに基づく財務書類の作成について、総務大臣から通知がありました。

この通知を受け本市では、補助簿となる固定資産台帳を整備するとともに、統一的な基準による発生主義や複式簿記の財務書類(4表)を作成しました。



《固定資産台帳の整備》

固定資産台帳とは、その取得から除売却処分に至るまで、その経緯を個々の資産ごとに管理するための帳簿で、所有する全ての固定資産(道路、公園、学校、公民館等)について、取得価額、耐用年数等のデータを網羅的に記載したものです。

固定資産台帳の整備は、「統一的な基準」により財務4表の作成にあたって前提とされており、貸借対照表は固定資産を適切に把握・分類した固定資産台帳に基づいて作成しています。

なお、固定資産台帳の情報については、効率的な公共施設等のマネジメントや保有財産(市が所有する不動産など)の有効利用等へ活用していきます。

※ 減価償却…使用に伴う資産の消耗・老朽化に合わせて、会計処理上、資産の価値を耐用年数(固定資産が使用できる期間として法に定められた年数)に応じて減少させていくことを減価償却といいます。この減少をコストとして計上したものを減価償却費と言い、貸借対照表と行政コスト計算書において科目として計上されます。

- ※1-1 単式簿記 主に財産の変動(増減)のみを記録する簿記。家計簿もこれに含まれます。
- ※2-1 複式簿記 ひとつの取引について、資産(例えば建築した施設)の増加と資産(建築にかかった経費)の減少という取引の二面性に着眼して記録する簿記。
- ※1-2 現金主義会計 収益と費用を現金の受け渡しの時点で認識する会計原則。
- ※2-2 発生主義会計 現金の受け渡し時点にかかわらず、取引の確定時点で収益又は費用を計上する会計原則。

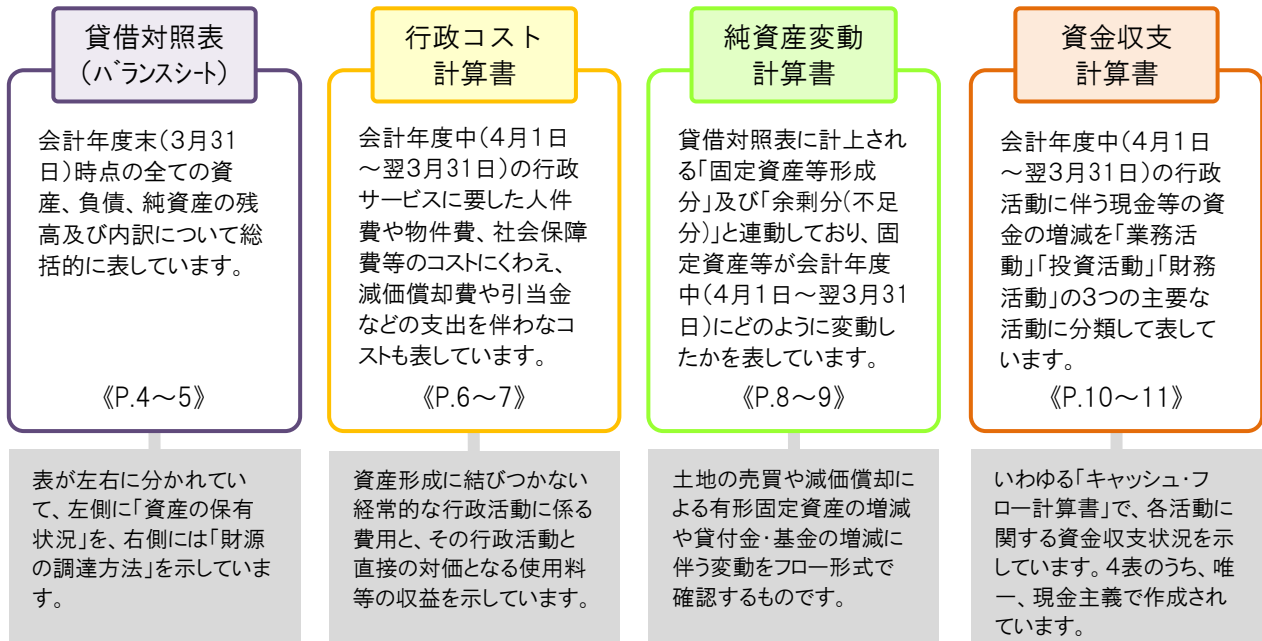
Ⅱ 新しい地方公会計制度における財務書類

財務書類(財務4表)とは

財務書類(財務4表)とは、企業会計に用いられる発生主義・複式簿記の考え方に基づいて作成される資料で、公会計では「貸借対照表」「行政コスト計算書」等の4つの表を作成することとされています。

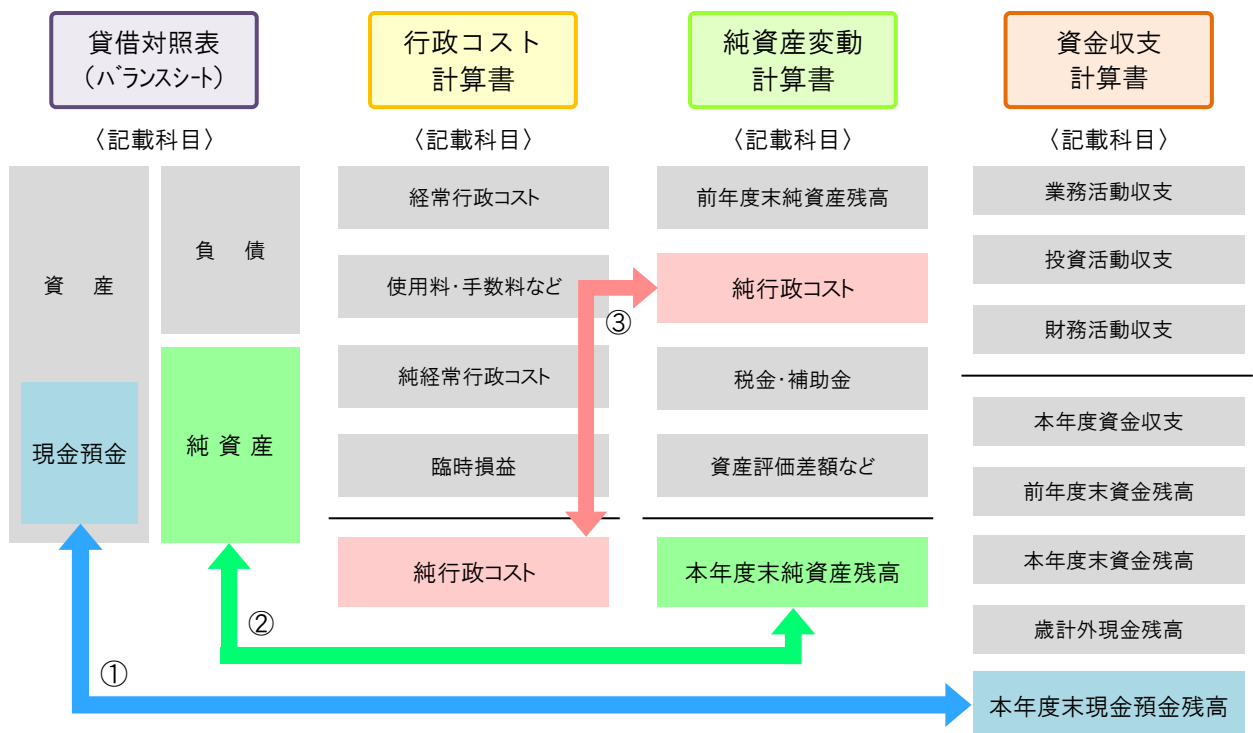
財務書類の作成により、資産や負債などのストック情報や、現金主義では見えにくいコスト情報等の把握が可能となります。

財務4表の概要



財務4表の相関関係図

財務4表は、各表はそれぞれが独立しているものではなく、表間で金額が連動している部分があり、有機的に結びついたものとなっています。なお、4表の結びつきを示した相関関係は下の図のとおりです。



Ⅲ 対象となる会計の範囲

統一的な基準による財務書類は、下図のとおり、①「一般会計等」と、これに特別会計（地方公営事業会計）や公営企業会計を含めた②「全体会計」、さらに本市と連携している関連団体（一部事務組合及び広域連合、第3セクター）の会計を加えた③「連結会計」の3つの区分で作成されます。

区 分		対象となる会計等	
③連結会計	①一般会計等 <small>(※1)</small>	一般会計	
		②全体会計	国民健康保険事業特別会計
			地方公営事業会計
	介護保険事業特別会計		
	後期高齢者医療事業特別会計		
	③連結会計	公営企業会計	水道事業会計
			下水道等事業会計
		一部事務組合 広域連合	淀川右岸水防事務組合
			大阪府後期高齢者医療広域連合
			大阪広域水道企業団（水道事業会計）
			大阪広域水道企業団（工業用水道事業会計）
	《一部事務組合》 市町村などが事務の一部を共同で処理するために設けられた特別地方公共団体 《広域連合》 市町村などが共同して広範囲に及ぶ業務を運営するために設けられた特別地方公共団体	大阪府都市競艇企業団 <small>(※2)</small>	
	第3セクター	茨木市土地開発公社	
茨木市保健医療センター			
茨木市文化振興財団			
茨木市観光協会			
《第3セクター》 市町村など（第1セクター）と民間（第2セクター）が共同出資して設立された事業体			

※1：一般会計及び地方公営事業会計以外の特別会計

※2：平成28年度から企業会計に移行したため、新たに連結を実施

IV 財務書類4表

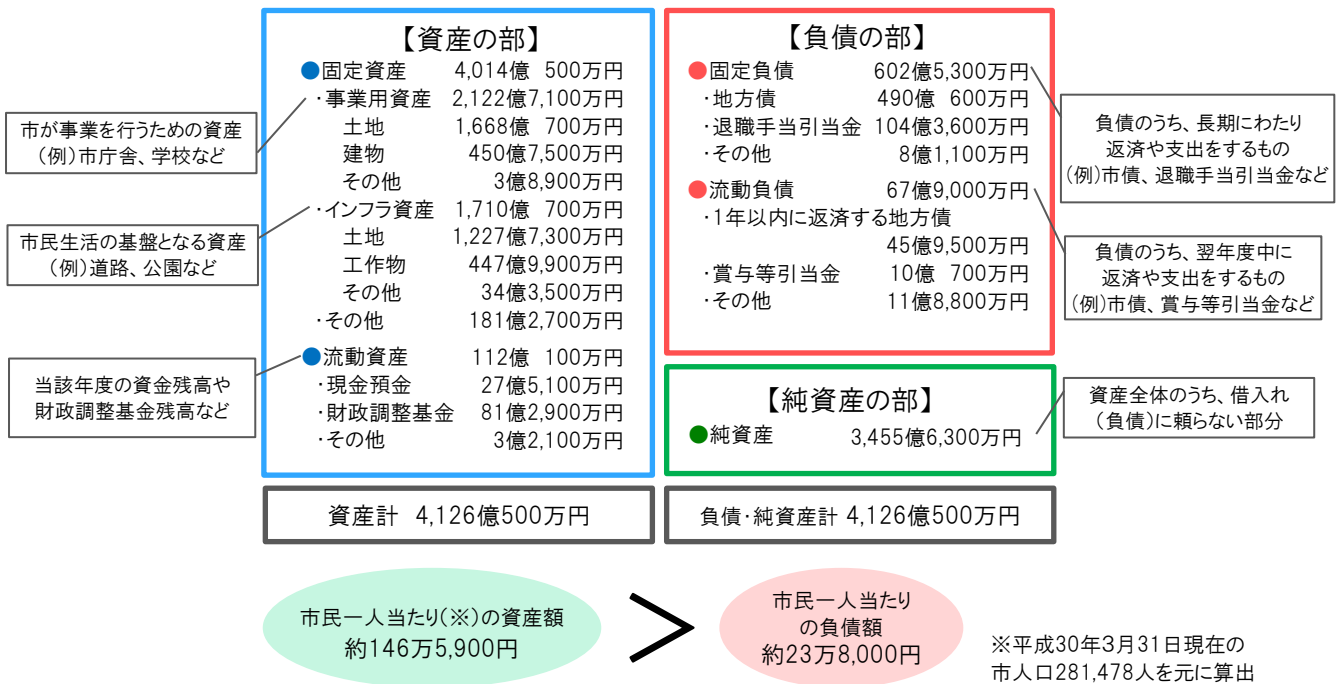
貸借対照表(BS)

貸借対照表は、会計年度末時点で、どのような資産を保有しているのか(資産保有状況)と、その資産がどのような財源でまかなわれているのか(財源調達状況)を対照表で示したもので、本市における資産・負債・純資産といったストック項目の残高が明らかとなります。資産が地方債等による将来世代の負担によって形成されたのか、基金及び税金等の過去又は現世代の負担によって形成されたのかが明らかとなります。

平成30年3月31日現在の茨木市の**資産**総額は4,126億500万円です。

資産調達の財源は、将来返済する地方債(市の借金)などの**負債**が670億4,200万円、これまでの世代が負担した**純資産**が3,455億6,300万円となっています。

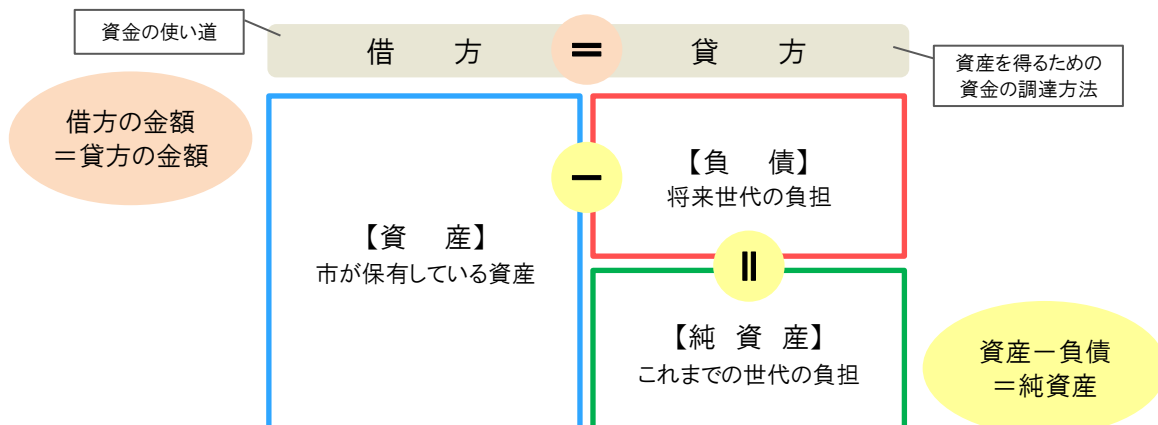
なお、市民一人当たりの金額に換算すると、**資産**は約146万5,900円、**負債**は約23万8,000円となります。



〈貸借対照表の見方〉

次ページのとおり、表は左右に分かれており、左側は**資産**を表し「借方」、右側は**負債**と**純資産**を表し「貸方」と言います。借方と貸方の金額は一致することから、貸借対照表は別名「バランスシート」と呼ばれています。

負債が**資産**を上回り、「**資産**－**負債**」で求められる「**純資産**」がマイナスになると、いわゆる「債務超過」となり健全でない財政状況であることを意味します。本市では、**資産**が**負債**を大きく上回っていることから、貸借対照表上、健全な財政状況であることが分かります。



■ 貸借対照表の概要

資産		負債	
行政サービスを提供するための公共施設等の固定資産や将来、行政サービスに使用する現金等の資産	固定資産 A	固定負債 C	返済期日が1年を超える債務など
庁舎、市営住宅、学校、市民利用施設、土地など	有形固定資産	地方債	契約などにより後年度の支払いが確定している、翌々年度以降の支払額など
事業用資産	事業用資産	長期未払金	将来発生する退職手当見込額
道路、橋りょう、河川、公園など	インフラ資産	退職手当引当金	財務書類作成上の第三セクター等に対する損失補償等の負担見込額
	物品	損失補償等引当金	
	無形固定資産	その他	
	ソフトウェア	流動負債 D	
	その他	1年内償還予定地方債	契約などにより後年度の支払いが確定している翌年度の支払額など
	投資その他の資産	未払金	翌年度に支払うことが予定されている賞与のうち当該年度負担額
公営企業・関連団体への出資金、有価証券など	投資及び出資金	賞与等引当金	
市税等の収入未済額のうち1年以上経過したもの	長期延滞債権	預り金	所得税、社会保険料など
	長期貸付金	その他	
	基金	負債合計 E=C+D	
	その他	純資産	
	徴収不能引当金	固定資産等形成分	(減価償却累計額の控除後の)固定資産等の残高
現金及び1年以内に換金可能な資産	流動資産 B	余剰分(不足分)	流動資産(短期貸付金と基金は除く)から負債を控除したもの
	現金預金		
市税等の収入未済額のうち1年以内に発生したもの	未収金		
	短期貸付金		
	基金		
	財政調整基金		
市税等の収入未済額のうち回収不能見込額	徴収不能引当金	純資産合計 F	
資産合計 A+B		負債及び純資産合計 E+F	

地方債など、将来世代の負担

過去又は現世代の負担
 ・固定資産形成分
 …資産形成のために
 充当した資源の蓄積
 ・余剰分(不足分)
 …消費可能な資源の蓄積(例:現金預金)

行政コスト計算書(PL)

行政コスト計算書は、一会計期間において、資産形成に結びつかない経常的な行政活動に係る費用(経常的な費用)と、その行政活動と直接の対価性のある使用料・手数料などの収益(経常的な収益)を対比させたものです。

「純経常行政コスト」は、地方公共団体の活動のために経常的に発生する人件費、物件費、移転費用(補助金等)などの費用から、使用料、手数料等の受益者負担収益を差し引くことで求められます。

「純行政コスト」は、「純経常行政コスト」に臨時に発生する損失、利益を加味したものです。

行政サービスを1年間提供するのにかかった「経常費用」は817億8,700万円で、使用料や手数料などの利用者負担額等を差し引いた「純経常行政コスト」は769億400万円となっています。また、災害復旧事業費などの臨時的なコストと収入を加味した「純行政コスト」は768億5,000万円です。

経常費用… ①	817億8,700万円
(内訳)	
人にかかるコスト (職員の給料や退職手当引当金など)	147億6,900万円
物にかかるコスト (消耗品や委託料、建物の維持管理や減価償却費など)	232億4,600万円
社会保障費等のコスト(移転費用) (障害福祉サービスや生活保護、医療費助成等の社会保障給付、各種団体に対する補助金、他会計への繰出金など)	427億1,600万円
その他の業務にかかるコスト (支払利息など)	10億5,600万円

経常費用については、「業務費用」となる人にかかるコストや物にかかるコストのほか、「移転費用」に分類される「社会保障費等のコスト」が最も多額であることが分かります。

その内訳としては、障害福祉サービスや生活保護をはじめとする扶助費が高い割合を占めています。

《コスト情報の「見える化」》

経常行政コストの中には、官庁会計では見えにくいコストとして、「人にかかるコスト」の退職手当に係る「引当金(※)」や、「物にかかるコスト」の「減価償却費」が計上されています。

これらは、実際の現金収支を伴わないコストに関する情報であり、このことにより、コスト情報に関する「見える化」が図られています。

経常収益… ②	48億8,300万円
使用料・手数料などの利用者負担、諸収入等	48億8,300万円

純経常行政コスト(①-②)… A	769億400万円
------------------	-----------

市民一人当たり(※)
約27万3,200円

臨時損益… B	△5,400万円
---------	----------

※平成30年3月31日現在の市人口281,478人を元に算出

純行政コスト(A+B)	768億5,000万円
-------------	-------------

市民一人当たり
約27万3,000円

※ 引当金 当期以前の事象が原因で、将来に特定の費用や損失が発生する確率が高く、その発生額を合理的に見積もることができる場合、その支出に対して準備される費用のこと。一般的に、将来支給が見込まれる退職手当や、翌年度の支給が見込まれる賞与にかかる引当金などがあります。

■ 行政コスト計算書の概要

経常費用 A		人件費、物件費、移転費用(補助金など)を発生額で計上
業務費用		
人件費		
職員給与費		
賞与等引当金繰入額	—	翌年度6月に支給する賞与のうち、H28年度分(12月から翌年3月までの4ヶ月分)を計上
退職手当引当金繰入額	—	当該年度に繰り入れた退職手当引当金見込額
その他		
物件費等		
物件費	—	消耗品費、光熱水費、印刷製本費、業務委託費、使用料及び賃借料、備品購入などの経費
維持補修費	—	資産形成につながらない公共施設等の維持修繕経費
減価償却費	—	固定資産について、使用期間中、毎年度資産的価値が減少するとみなし、費用計上するもの
その他		
その他の業務費用		
支払利息		
徴収不能引当金繰入額		
その他		
移転費用	—	市民や特別会計など他団体・他会計に移転する経費
補助金等	—	事業実施に係る補助金、助成金、負担金
社会保障給付	—	医療、子育て、障害、生活保護などの扶助費
他会計への繰出金	—	国保会計繰出金、下水道等事業会計繰出金など
その他		
経常収益 B		
使用料及び手数料		経常的に発生する費用から、使用料及び手数料といった受益者負担収益を差し引くことで純経常行政コストを算定
その他		
純経常行政コスト		
臨時損失(C)	—	災害復旧費、資産除売却損などの臨時に発生した経費など
臨時利益(D)	—	資産の売却による収入が帳簿価額を上回る場合の差額など
資産売却益		
その他		
純行政コスト A-B+C-D		臨時に発生する損失、利益を加味して純行政コスト(税を主とする一般財源等で賄うべきコスト)を算定

純資産変動計算書(NW)

純資産変動計算書は、貸借対照表の純資産の部に計上されている各項目が、1年間でどのように変動したかを表すものです。

1年間の純行政コストの金額に対して、税金等及び国県等補助金の金額がどの程度あるかを比較することにより、行政サービスの提供に必要なコストが、受益者負担以外の財源によってどの程度賄われているのかを把握することが可能となります。

平成30年度の純行政コスト768億5,000万円に対して、財源(税金等、国府補助金)は791億800万円であるため、「本年度差額」は22億5,800万円となります。

このほか、固定資産等の無償所管換等によるマイナス分を加えた「本年度純資産変動額」が52億6,500万円となったことにより、平成30年度の純資産残高は3,455億6,300万円となりました。

前年度末純資産残高 … A	3,402億9,800万円	
純行政コスト(△) … ①	△768億5,000万円	「行政コスト計算書」の 純行政コストと一致
財源 … ②	791億800万円	
税金等	546億1,500万円	
国府補助金	244億9,300万円	
本年度差額(①+②) … B	22億5,800万円	
本年度純資産変動額 … C	52億6,500万円	
本年度末純資産残高(A+C)	3,455億6,300万円	「貸借対照表」の 純資産額と一致

〈純資産変動計算書の見方〉

純行政コストの金額と税金等及び国県等補助金の金額の差額は、財政的な収支均衡が図られているかどうかを表しています。

コストと収益の差額は、民間企業においては損益や利益という形で示されることが想定されますが、それとは意味が異なります。

本年度差額がプラスの場合は、現世代の負担によって将来世代も利用可能な資源を貯蓄したことを意味する一方、マイナスの場合は、将来世代が利用可能な資源を現世代が消費してサービスを受けていることを意味しています。

なお、茨木松ヶ本線の整備や、小中学校のエレベーター設置・トイレ改修等による有形固定資産の増加などにより、本年度末純資産残高は3,455億6,300万円となりました。

■純資産変動計算書の概要

前年度末純資産残高	A	
純行政コスト(△)		行政コスト計算書の「純行政コスト」と連動
財源		
税金等		市税、地方交付税、地方譲与税・交付金など
国県等補助金		国・府支出金
本年度差額	B	
固定資産等の変動(内部変動)		
有形固定資産等の増加		純行政コストの金額に対して、税金等及び国の補助金等受入の金額がどの程度あるかを見ることにより、受益者負担以外の財源によりどの程度賄われているかを把握
有形固定資産等の減少		
貸付金・基金等の増加		
貸付金・基金等の減少		
資産評価差額		
無償所管換等		資産除売却損益
その他		無償で譲渡または取得した固定資産価額、その他年度途中に判明した固定資産価額など
本年度純資産変動額	D=B+C	
本年度末純資産残高	A+D	貸借対照表の「純資産」と連動

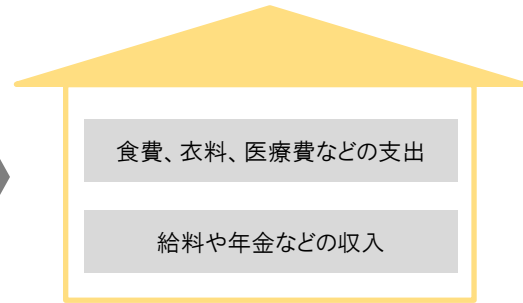
資金収支計算書

資金収支計算書は、行政活動に伴う資金収支を、毎年度継続的に実施される行政サービスの「業務活動」と資産形成等につながる投資的事業を行う「投資活動」、地方債の借入れや返済の償還に係る「財務活動」に区分して表しています。

基礎的財政収支(プライマリーバランス)等の指標により、借金に頼った財政運営を行っているかが表されません。

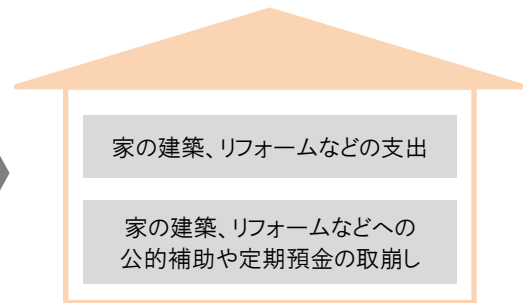
業務活動		行政サービスを行う中で毎年度継続的に収入・支出されるもの
支 出	人件費	145億3,200万円
	物件費	177億6,600万円
	社会保障費	258億9,700万円
	その他(補助金、繰出金等)	177億7,200万円
収 入	市税など	546億1,400万円
	国や大阪府からの補助金	236億3,000万円
	その他	48億2,100万円
《業務活動の収支》… ①		70億8,700万円

家計に例えてみると…



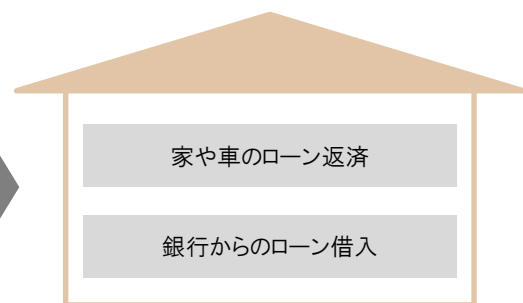
投資活動		公共施設などの整備や投資・貸付金などの収入・支出
支 出	道路や公共施設等の整備費	46億9,800万円
	基金への積立て	13億9,900万円
	その他	4億1,500万円
収 入	国や大阪府からの補助金	8億6,300万円
	貸付金の元金回収	4億1,000万円
	基金の取崩し	5,500万円
	その他	2億5,100万円
《投資活動の収支》… ②		△49億3,300万円

家計に例えてみると…



財務活動		地方債などの外部からの借入れや、その返済などの収入・支出
支 出	地方債の返済	51億 600万円
	その他	7,200万円
収 入	地方債の発行	23億3,700万円
《財務活動の収支》… ③		△28億4,100万円

家計に例えてみると…



本年度資金収支額 (①+②+③) … A	△6億8,700万円
前年度末資金残高 … B	23億4,400万円
本年度末資金残高 (A+B)	16億5,700万円

本年度末資金残高
16億5,700万円
 +
 本年度末歳計外現金残高
10億9,400万円
 =
 本年度末
資金預金残高
27億5,100万円

貸借対照表の「現金預金」と一致

■ 資金収支計算書の概要

業務活動収支	通常の業務活動に係る収支
業務支出	
業務費用支出	人件費、物件費等、市債の支払利息など
移転費用支出	事業実施等に係る補助金・助成金・負担金、福祉・医療・子育て・障害・生活保護などの扶助費、他会計への繰出金
業務収入	
税金等収入	
国県等補助金収入	投資活動収入以外の国・府支出金
使用料及び手数料収入	
その他の収入	
臨時支出	
臨時収入	
業務活動収支 A	
投資活動収支	建物等の建設や用地取得、その他資産形成につながる支出、基金への積立て・取崩しなどに伴う資金の収支
投資活動支出	
公共施設等整備費支出	
基金積立金支出	
投資及び出資金支出	
貸付金支出	
その他の支出	
投資活動収入	
国県等補助金収入	公共施設等の整備に係る国・府支出金
基金取崩収入	
貸付金元金回収収入	
資産売却収入	
その他の収入	
投資活動収支 B	
財務活動収支	市債発行額や元金償還金等に係る資金の収支
財務活動支出	
地方債償還支出	
その他の支出	
財務活動収入	
地方債発行収入	
その他の収入	
財務活動収支 C	
本年度資金収支額 $D=A+B+C$	
前年度末資金残高 E	
本年度末資金残高 $F=D+E$	形式収支(歳入決算額－歳出決算額)
前年度末歳計外現金残高	
本年度歳計外現金増減額	
本年度末歳計外現金残高 G	
本年度末現金預金残高 $F+G$	貸借対照表の流動資産中「現金預金」と連動

V 財務書類から見えてくる茨木市の状況(平成29年度決算)

統一的な基準による地方公会計の整備により、従来の決算統計や地方公共団体の財政の健全化に関する法律における健全化指標等、既存の指標に加え、資産・負債に関する新たな指標を算出することにより、新たな財政状況の分析が可能となります。

分析の視点における主な指標は次のとおりです。

資産形成度

資産形成度は、「将来世代に残る資産はどのくらいあるか」の視点において、資産増減の要因や資産形成の傾向、目的別の比重等の把握が可能となります。

資産に関する情報は、これまで決算書における「財産に関する調書」における面積・個数等の情報のみでしたが、固定資産台帳の整備に伴う貸借対照表においては、資産の部において保有する資産のストック情報を一覧表示しており、資産に係る新たな情報を提供するものといえます。

資産老朽化比率

保有している有形固定資産のうち、償却資産の取得価額等に対する減価償却累計額の割合を算出することにより、耐用年数に対して資産の取得からどの程度経過したのかを把握することが可能となります。

さらに、資産の償却が進んでいる行政分野や施設について確認することにより、公共施設マネジメントにおける老朽化対策の検討の情報として活用することも可能となります。

○資産老朽化比率＝有形固定資産の各減価償却累計額÷有形固定資産のうち償却資産の取得原価

$$= (1,987億200万円 \div 2,903億7,300万円) \times 100 = \underline{68.4\%}$$

《分析》 本市における公共施設等の資産は取得から一定の期間が経過し、全体的に資産の償却が進んでいることが分かります。

今後は、平成29年3月に策定した「公共施設マネジメント基本方針」の基本理念である「安全で快適な市民生活の確保とまちの持続的発展の実現」のもと、これからのまちづくりを見据えた全体最適化の取組を進めていきます。

世代間公平性

世代間公平性は、「将来世代と現世代との負担の分担は適切か」について、貸借対照表で示される資産、負債及び純資産の対比によって示すものです。財政運営の結果として、資産形成における世代間の負担のバランスが適切か、どのように推移しているかを端的に把握することができます。

純資産比率

純資産の増加は、過去及び現世代の負担により将来世代が利用可能な資源を蓄積したことを表す一方、純資産の減少は、将来世代が利用可能な資源を過去及び現世代が消費していると捉えられます。

このため、純資産に対する資産の比率を算出することにより、保有している有形固定資産等がどの世代の負担により行われたのかを把握し、世代間負担の公平性を測ることが可能となります。

○純資産比率＝「貸借対照表」の純資産÷資産合計

$$= (3,455億6,300万円 \div 4,126億500万円) \times 100 = \underline{83.8\%}$$

《分析》 資産の取得については、将来世代の負担と比べて現世代による負担の割合が高くなっています。これは、負担を先送りせず、将来における債務返済費用の抑制に努めることで、必要なサービスに充てる十分な経費の確保に努めることができていることを示しています。

持続可能性(健全性)

持続可能性(健全性)は、「財政に持続可能性があるか(借金がどのくらいあるか)」という財政運営に関する本質的な視点に基づいて示される指標です。

財政の健全性に関しては、決算統計時に示される指標「健全化判断比率」による分析が行われますが、財務4表の貸借対照表では、発生主義によって健全化判断比率では捉えることができない退職手当引当金などを含めた全ての負債を捉えることができます。

基礎的財政収支(プライマリ・バランス)

資金収支計算書上の業務活動収支及び、投資活動収支の合算額を算出することにより、地方債等の元利償還額を除いた歳出と、地方債等発行収入を除いた歳入のバランスを示す指標となり、当該バランスが均衡している場合には、持続可能な財政運営が実現できているといえます。

○基礎的財政収支＝「資金収支計算書」の業務活動収支(支出から支払利息を除く)＋投資活動収支

$$= (76億1,500万円 + \Delta 49億3,300万円) = 26億8,200万円 \rightarrow \underline{26億8,200万円}の黒字$$

《分析》 平成29年度の茨木市の基礎的財政収支は、収入が支出を上回っている(黒字となった)ため、健全であると言えます。

しかし、収入には国や大阪府からの補助金など外部からの収入(依存財源)が含まれており、その割合が大きいほど外部の影響を受けやすくなるため、自己財源の比率を高めていくことにより、さらなる財政の安定化を図っていく必要があります。

債務償還可能年数

当該年度のストック情報である実質債務(将来負担額－充当可能基金残高)が、当該年度のフローの業務活動収支の黒字分等を償還財源とする場合にその何年分あるかを示す指標です。

○債務償還可能年数＝(将来負担額－充当可能基金残高)÷(業務収入等－業務支出)

$$= (805億4,800万円 - 221億300万円) \div (852億9,100万円 - 759億6,700万円) = \underline{6.3年}$$

《分析》 本市は北摂各市の平均と比較し、償還可能年数が短いことから、市債の残高が少ないといえます。今後も低い数値を維持していくため、財政計画に基づく健全化の取組みを進め、引き続き市債残高の抑制などに取り組んでいく必要があります。

効率性

行政コスト計算書で算出される行政コストを人口で除して住民一人当たり行政コストとすることにより、行政活動の効率性を見ることができます。

住民ひとり当たり行政コスト

効率性を測るためには、行政コストに着目することが有効となりますが、人口規模や面積等により、必要となるコストは異なるので、類似団体とそのまま比較することはできませんが、1人当たりの行政コストの額を算出することにより、市民にとってもわかりやすい情報となるとともに、他団体との比較が可能となります。

○住民ひとり当たり行政コスト＝純経常行政コスト÷住民基本台帳人口(平成30年3月31日現在)

$$= 769億400万円 \div 281,478人 = \underline{273,215円}$$

《分析》 本市は過去から効率的な行政サービスの実践に努めてきたことから、北摂各市の平均との比較では低額となっています。

自律性

「歳入はどのくらい税収等で賄われているか(受益者負担の水準はどうなっているか)」といった観点から、地方公共団体の財政構造の自律性に関するものです。

決算における歳入の内訳や財政力指数が関連しますが、財務書類については、行政コスト計算書において使用料・手数料などの受益者負担の割合を算出することが可能であるため、これを受益者負担水準の適正さの判断指標として用いることができます。

受益者負担比率

行政コスト計算書における経常収益は、使用料・手数料など行政サービスに係る受益者負担の金額です。行政サービス提供に対する負担(経常費用)について、どの程度、使用料や手数料等の受益者負担(経常収益)で賄えているのかを表します。

行政サービス全体の受益者負担の割合を、経年比較したり、類似団体と比較したりすることにより、受益者負担の特徴を把握していくのに活用できます。

○受益者負担比率＝経常収益÷経常費用

$$=48億8,300万円÷817億8,700万円×100=6.0\%$$

《分析》 行政サービスの提供に対する負担(経常費用)について、本市は北摂各市の中で比較的高いため、受益者負担(経常収益)により賄えているといえます。

VI 一般会計等 財務書類

貸借対照表(一般会計等)

(平成30年3月31日現在)

(単位:百万円)

科 目	金 額	科 目	金 額
【資産の部】		【負債の部】	
固定資産	401,405 ※	固定負債	60,253 ※
有形固定資産	384,328 ※	地方債	49,060
事業用資産	212,271 ※	長期未払金	716
土地	166,807	退職手当引当金	10,436
立木竹	-	損失補償等引当金	-
建物	139,898	その他	40
建物減価償却累計額	△ 94,823	流動負債	6,790 ※
工作物	24,707	1年内償還予定地方債	4,595
工作物減価償却累計額	△ 24,390	未払金	92
船舶	-	未払費用	-
船舶減価償却累計額	-	前受金	-
浮標等	-	前受収益	-
浮標等減価償却累計額	-	賞与等引当金	1,007
航空機	-	預り金	1,094
航空機減価償却累計額	-	その他	1
その他	-		
その他減価償却累計額	-	負 債 合 計	67,042 ※
建設仮勘定	71	【純資産の部】	
インフラ資産	171,007	固定資産等形成分	409,533
土地	122,773	余剰分(不足分)	△ 63,970
建物	898		
建物減価償却累計額	△ 468		
工作物	118,259		
工作物減価償却累計額	△ 73,460		
その他	-		
その他減価償却累計額	-		
建設仮勘定	3,005		
物品	6,611		
物品減価償却累計額	△ 5,561		
無形固定資産	460 ※		
ソフトウェア	459		
その他	0		
投資その他の資産	16,617		
投資及び出資金	1,139		
有価証券	-		
出資金	1,139		
その他	-		
投資損失引当金	-		
長期延滞債権	1,402		
長期貸付金	300		
基金	14,007		
減債基金	-		
その他	14,007		
その他	-		
徴収不能引当金	△ 231		
流動資産	11,201		
現金預金	2,751		
未収金	383		
短期貸付金	0		
基金	8,129		
財政調整基金	8,129		
減債基金	-		
棚卸資産	-		
その他	-		
徴収不能引当金	△ 62		
資 産 合 計	412,605 ※	純 資 産 合 計	345,563
		負 債 及 び 純 資 産 合 計	412,605

※ 下位項目との金額差は、単位未満の四捨五入によるものです。

行政コスト計算書(一般会計等)

自 平成29年4月 1日

至 平成30年3月31日

(単位:百万円)

科 目	金 額
経常費用	81,787 ※
業務費用	39,070 ※
人件費	14,769 ※
職員給与費	11,894
賞与等引当金繰入額	1,007
退職手当引当金繰入額	895
その他	972
物件費等	23,246
物件費	14,814
維持補修費	2,897
減価償却費	5,529
その他	6
その他の業務費用	1,055
支払利息	528
徴収不能引当金繰入額	1
その他	526
移転費用	42,716
補助金等	9,117
社会保障給付	25,897
他会計への繰出金	7,648
その他	54
経常収益	4,883
使用料及び手数料	1,802
その他	3,081
純 経 常 行 政 コ ス ト	76,904
臨時損失	18
災害復旧事業費	18
資産除売却損	0
投資損失引当金繰入額	-
損失補償等引当金繰入額	-
その他	0
臨時利益	72
資産売却益	72
その他	-
純 行 政 コ ス ト	76,850

※ 下位項目との金額差は、単位未満の四捨五入によるものです。

純資産変動計算書(一般会計等)

自 平成29年4月 1日

至 平成30年3月31日

(単位:百万円)

科 目	合 計	固 定 資 産 等 形 成 分	余 剰 分 (不 足 分)
前年度末純資産残高	340,298 ※	406,172	△ 65,875
純行政コスト(△)	△ 76,850		△ 76,850
財源	79,108		79,108
税金等	54,615		54,615
国県等補助金	24,493		24,493
本年度差額	2,258		2,258
固定資産等の変動(内部変動)		354 ※	△ 354
有形固定資産等の増加		10,254	△ 10,254
有形固定資産等の減少		△ 11,244	11,244
貸付金・基金等の増加		1,399	△ 1,399
貸付金・基金等の減少		△ 55	55
資産評価差額	△ 1	△ 1	
無償所管換等	3,162	3,162	
その他	△ 154	△ 154	-
本年度純資産変動額	5,265	3,361	1,904
本年度末純資産残高	345,563 ※	409,533	△ 63,970 ※

※ 下位項目との金額差は、単位未満の四捨五入によるものです。

資金収支計算書(一般会計等)

自 平成29年4月 1日

至 平成30年3月31日

(単位:百万円)

科 目	金 額
【業務活動収支】	
業務支出	75,967
業務費用支出	33,250 ※
人件費支出	14,532
物件費等支出	17,766
支払利息支出	528
その他の支出	425
移転費用支出	42,716
補助金等支出	9,117
社会保障給付支出	25,897
他会計への繰出支出	7,648
その他の支出	54
業務収入	83,065
税込等収入	54,614
国県等補助金収入	23,630
使用料及び手数料収入	1,798
その他の収入	3,023
臨時支出	11
災害復旧事業費支出	11
その他の支出	-
臨時収入	-
業 務 活 動 収 支	7,087
【投資活動収支】	
投資活動支出	6,512 ※
公共施設等整備費支出	4,698
基金積立金支出	1,399
投資及び出資金支出	6
貸付金支出	410
その他の支出	-
投資活動収入	1,579
国県等補助金収入	863
基金取崩収入	55
貸付金元金回収収入	410
資産売却収入	251
その他の収入	-
投 資 活 動 収 支	△ 4,933
【財務活動収支】	
財務活動支出	5,178
地方債償還支出	5,106
その他の支出	72
財務活動収入	2,337
地方債発行収入	2,337
その他の収入	-
財 務 活 動 収 支	△ 2,841
本 年 度 資 金 収 支 額	△ 687
前 年 度 末 資 金 残 高	2,344
本 年 度 末 資 金 残 高	1,657
前年度末歳計外現金残高	1,049
本年度歳計外現金増減額	46
本年度末歳計外現金残高	1,094 ※
本 年 度 末 現 金 預 金 残 高	2,751

※ 下位項目との金額差は、単位未満の四捨五入によるものです。

VII 全体会計 財務書類

全体貸借対照表

(平成30年3月31日現在)

(単位:百万円)

科 目	金 額	科 目	金 額
【資産の部】		【負債の部】	
固定資産	532,896 ※	固定負債	155,215
有形固定資産	500,905	地方債	79,022
事業用資産	212,271 ※	長期未払金	716
土地	166,807	退職手当引当金	10,806
立木竹	-	損失補償等引当金	-
建物	139,898	その他	64,671
建物減価償却累計額	△ 94,823	流動負債	12,946 ※
工作物	24,707	1年内償還予定地方債	8,131
工作物減価償却累計額	△ 24,390	未払金	2,203
船舶	-	未払費用	-
船舶減価償却累計額	-	前受金	1
浮標等	-	前受収益	-
浮標等減価償却累計額	-	賞与等引当金	1,098
航空機	-	預り金	1,513
航空機減価償却累計額	-	その他	1
その他	-		
その他減価償却累計額	-		
建設仮勘定	71		
インフラ資産	283,560 ※		
土地	128,263		
建物	6,252		
建物減価償却累計額	△ 3,543		
工作物	303,552		
工作物減価償却累計額	△ 155,458		
その他	376		
その他減価償却累計額	△ 160		
建設仮勘定	4,280		
物品	26,001		
物品減価償却累計額	△ 20,928		
無形固定資産	13,537		
ソフトウェア	499		
その他	13,038		
投資その他の資産	18,454 ※		
投資及び出資金	1,512		
有価証券	499		
出資金	1,013		
その他	-		
投資損失引当金	-		
長期延滞債権	2,840		
長期貸付金	300		
基金	14,564		
減債基金	-		
その他	14,564		
その他	-		
徴収不能引当金	△ 763		
流動資産	21,506 ※		
現金預金	10,918		
未収金	2,451		
短期貸付金	0		
基金	8,129		
財政調整基金	8,129		
減債基金	-		
棚卸資産	39		
その他	324		
徴収不能引当金	△ 354		
繰延資産	-		
資産合計	554,402		
		負債合計	168,161
		【純資産の部】	
		固定資産等形成分	541,041
		余剰分(不足分)	△ 154,800
		純資産合計	386,241
		負債及び純資産合計	554,402

※ 下位項目との金額差は、単位未満の四捨五入によるものです。

全体行政コスト計算書

自 平成29年4月 1日

至 平成30年3月31日

(単位:百万円)

科 目	金 額
経常費用	136,894
業務費用	50,060 ※
人件費	15,755 ※
職員給与費	12,707
賞与等引当金繰入額	1,047
退職手当引当金繰入額	975
その他	1,025
物件費等	31,918
物件費	18,770
維持補修費	3,086
減価償却費	10,053
その他	9
その他の業務費用	2,387
支払利息	1,510
徴収不能引当金繰入額	33
その他	844
移転費用	86,834 ※
補助金等	60,867
社会保障給付	25,914
他会計への繰出金	0
その他	54
経常収益	17,022
使用料及び手数料	9,680
その他	7,342
純 経 常 行 政 コ ス ト	119,872
臨時損失	174
災害復旧事業費	18
資産除売却損	25
投資損失引当金繰入額	-
損失補償等引当金繰入額	-
その他	131
臨時利益	236
資産売却益	72
その他	164
純 行 政 コ ス ト	119,811 ※

※ 下位項目との金額差は、単位未満の四捨五入によるものです。

全体純資産変動計算書

自 平成29年4月 1日

至 平成30年3月31日

(単位:百万円)

科 目	合 計	固 定 資 産 等 形 成 分	余 剰 分 (不 足 分)
前年度末純資産残高	378,625	539,751	△ 161,126
純行政コスト(△)	△ 119,811	/	△ 119,811
財源	124,514	/	124,514
税込等	85,617	/	85,617
国県等補助金	38,897	/	38,897
本 年 度 差 額	4,703	/	4,703
固定資産等の変動(内部変動)	/	△ 1,623	1,623
有形固定資産等の増加	/	14,812	△ 14,812
有形固定資産等の減少	/	△ 17,779	17,779
貸付金・基金等の増加	/	1,399	△ 1,399
貸付金・基金等の減少	/	△ 55	55
資産評価差額	△ 1	△ 1	/
無償所管換等	3,193	3,193	/
その他	△ 279	△ 279	-
本 年 度 純 資 産 変 動 額	7,616	1,290	6,326
本 年 度 末 純 資 産 残 高	386,241	541,041	△ 154,800

※ 下位項目との金額差は、単位未満の四捨五入によるものです。

全体資金収支計算書

自 平成29年4月 1日

至 平成30年3月31日

(単位:百万円)

科 目	金 額
【業務活動収支】	
業務支出	130,427 ※
業務費用支出	43,507
人件費支出	15,607
物件費等支出	21,941
支払利息支出	1,379
その他の支出	4,580
移転費用支出	86,920 ※
補助金等支出	60,953
社会保障給付支出	25,914
他会計への繰出支出	0
その他の支出	54
業務収入	142,277 ※
税込等収入	83,942
国県等補助金収入	37,338
使用料及び手数料収入	9,657
その他の収入	11,341
臨時支出	135 ※
災害復旧事業費支出	11
その他の支出	123
臨時収入	103
業務活動収支	11,819 ※
【投資活動収支】	
投資活動支出	10,716
公共施設等整備費支出	7,277
基金積立金支出	1,721
投資及び出資金支出	0
貸付金支出	1,718
その他の支出	-
投資活動収入	5,133 ※
国県等補助金収入	1,438
基金取崩収入	55
貸付金元金回収収入	1,718
資産売却収入	253
その他の収入	1,668
投資活動収支	△ 5,583
【財務活動収支】	
財務活動支出	9,799
地方債償還支出	8,727
その他の支出	1,072
財務活動収入	4,209 ※
地方債発行収入	3,214
その他の収入	994
財務活動収支	△ 5,591 ※
本年度資金収支額	645
前年度末資金残高	9,179
本年度末資金残高	9,823 ※
前年度末歳計外現金残高	1,049
本年度歳計外現金増減額	46
本年度末歳計外現金残高	1,094 ※
本年度末現金預金残高	10,918 ※

※ 下位項目との金額差は、単位未満の四捨五入によるものです。

VIII 連結会計 財務書類

連結貸借対照表

(平成30年3月31日現在)

(単位:百万円)

科 目	金 額	科 目	金 額
【資産の部】		【負債の部】	
固定資産	554,122 ※	固定負債	166,626
有形固定資産	520,470 ※	地方債	86,674
事業用資産	212,273 ※	長期未払金	716
土地	166,808	退職手当引当金	11,011
立木竹	-	損失補償等引当金	-
建物	139,903	その他	68,225
建物減価償却累計額	△ 94,827	流動負債	15,572 ※
工作物	24,707	1年内償還予定地方債	8,753
工作物減価償却累計額	△ 24,390	未払金	4,018
船舶	-	未払費用	9
船舶減価償却累計額	-	前受金	8
浮標等	-	前受収益	-
浮標等減価償却累計額	-	賞与等引当金	1,122
航空機	-	預り金	1,541
航空機減価償却累計額	-	その他	120
その他	0	負債合計	182,198
その他減価償却累計額	0	【純資産の部】	
建設仮勘定	71	固定資産等形成分	552,307
インフラ資産	300,852	余剰分(不足分)	△ 153,459
土地	129,906	他団体出資等分	163
建物	12,787		
建物減価償却累計額	△ 7,262		
工作物	327,090		
工作物減価償却累計額	△ 169,550		
その他	395		
その他減価償却累計額	△ 160		
建設仮勘定	7,646		
物品	34,768		
物品減価償却累計額	△ 27,423		
無形固定資産	14,467		
ソフトウェア	565		
その他	13,902		
投資その他の資産	19,185 ※		
投資及び出資金	1,138		
有価証券	664		
出資金	469		
その他	5		
長期延滞債権	2,840		
長期貸付金	300		
基金	15,632		
減債基金	-		
その他	15,632		
その他	38		
徴収不能引当金	△ 764		
流動資産	27,087		
現金預金	15,157		
未収金	2,856		
短期貸付金	0		
基金	8,129		
財政調整基金	8,129		
減債基金	-		
棚卸資産	923		
その他	378		
徴収不能引当金	△ 356		
繰延資産	-		
資産合計	581,209	純資産合計	399,011
		負債及び純資産合計	581,209

※ 下位項目との金額差は、単位未満の四捨五入によるものです。

連結行政コスト計算書

自 平成29年4月 1日

至 平成30年3月31日

(単位:百万円)

科 目	金 額
経常費用	170,157
業務費用	56,351
人件費	16,194
職員給与費	13,023
賞与等引当金繰入額	1,071
退職手当引当金繰入額	990
その他	1,110
物件費等	35,366
物件費	20,562
維持補修費	3,298
減価償却費	10,970
その他	536
その他の業務費用	4,791
支払利息	1,663
徴収不能引当金繰入額	33
その他	3,095
移転費用	113,806
補助金等	87,303
社会保障給付	25,914
他会計への繰出金	0
その他	589
経常収益	23,830
使用料及び手数料	12,015
その他	11,815
純 経 常 行 政 コ ス ト	146,327
臨時損失	233
災害復旧事業費	18
資産除売却損	25
損失補償等引当金繰入額	-
その他	190
臨時利益	250
資産売却益	85
その他	165
純 行 政 コ ス ト	146,310

※ 下位項目との金額差は、単位未満の四捨五入によるものです。

連結純資産変動計算書

自 平成29年4月 1日
至 平成30年3月31日

(単位:百万円)

科 目	合 計	固 定 資 産 等 形 成 分	余 剰 分 (不 足 分)	他団体等出資分
前年度末純資産残高	391,297 ※	551,559	△ 160,270	9
純行政コスト(△)	△ 146,310	/	△ 146,310	0
財源	151,597	/	151,597	0
税金等	99,214	/	99,214	0
国県等補助金	52,383	/	52,383	0
本年度差額	5,287	/	5,287	0
固定資産等の変動(内部変動)	/	△ 1,620	1,620	/
有形固定資産等の増加	/	14,839	△ 14,839	/
有形固定資産等の減少	/	△ 17,789	17,789	/
貸付金・基金等の増加	/	1,403	△ 1,403	/
貸付金・基金等の減少	/	△ 73	73	/
資産評価差額	9	9	/	/
無償所管換等	3,195	3,195	/	/
他団体出資等分の増加	-	/	/	-
他団体出資等分の減少	-	/	/	-
比例連結割合変更に伴う差額	155	/	/	155
その他	△ 932	△ 836	△ 96	/
本年度純資産変動額	7,714	748	6,811	155
本年度末純資産残高	399,011 ※	552,307	△ 153,459	163 ※

※ 下位項目との金額差は、単位未満の四捨五入によるものです。

※連結会計における財務書類については、総務省作成マニュアル「連結財務書類の手引き」に基づき、資金収支計算書をのぞく貸借対照表・行政コスト計算書・純資産変動計算書を作成しています。

いばらきの今と未来をまもるため



いばら騎士社!